

そ ら 宇 宙



更なる日本語指導の充実に向けて

杉並区立済美教育センター 統括指導主事 加藤 則之

令和3年12月7日（火）、済美教育センター研究室にて「令和3年度 外国人児童生徒等教育研修」を実施しました。「文部科学省外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣事業」として、日本語の指導を必要としている外国人や海外から帰国した日本人の児童生徒への指導・支援について、アドバイザーである講師の先生からお話をいただきました。当日は、杉並区教育委員会で児童生徒への日本語指導を担当している職員や外部講師、指導主事が20名ほど会場に集合し、区立小中学校からもオンラインで数名の先生方が参加してくださいました。

講師は、文部科学省外国人児童生徒等アドバイザーである、宮城教育大学教育学部教授の市瀬智紀先生をお招きしました。済美教育センターが中心となって、市瀬先生と参加された先生方をオンラインでつなぎ、画面を通しての遠隔でのやり取りとなりましたが、市瀬先生が、現在の日本語指導の状況や使用している教材等について、受講者とコミュニケーションを取りながら進めてくださったので、担当者が自分の日頃の指導を振り返ることができ、非常に貴重な研修となりました。

印象に残ったお話を2点、紹介します。

1点目は、文部科学省HPに掲載されている「JSL評価参照枠の6段階のステージ等」を活用し、指導している児童生徒の現在の日本語習得状況を把握して、どのような指導を行うかの目安を確認すべきであるとのことのお話です。資料の一部を掲載しますが、具体的な指導の内容については、文部科学省HPを御確認ください。

「JSL評価参照枠」		「個別の指導計画」 の学習目標項目の 段階	『外国人児童生徒受入れの手引き』 の日本語プログラム				
ステ ージ	学齢期の子どもの在籍学級参加との関係		サバイバル 日本語	日本語基礎	技能別日本語	日本語と教科の統合学習	教科の補習 (適宜)
1	学校生活に必要な日本語の習得が始まる。	初期指導 (前期)	↓	↓	↓	↓	↓
2	支援を得て、学校生活に必要な日本語の習得が進む。	初期指導 (後期)					
3	支援を得て、日常的なトピックについて理解し、学級活動にも部分的にある程度参加できる。	教科につながる 初歩的な学習					
4	日常的なトピックについて理解し、学級活動にある程度参加できる。	教科につながる 基本的な学習					
5	教科内容と関連したトピックについて理解し、授業にある程度の支援を得て参加できる。	教科につながる 学習					
6	教科内容と関連したトピックについて理解し、積極的に授業に参加できる。	教科学習					



https://www.mext.go.jp/content/1422838_03.pdf

2点目は、ある帰国生徒の経験談で、「社会科は特に勉強するのに時間がかかったが、ある語句が分からないときに、どうしてそうなったのかという経緯と、そこから何が生まれたのかという影響をセットで覚えるようにした。」というお話です。

日本語指導を必要としている児童生徒が、教科の学習を中心に学びを進めていくことができるよう、日々の指導・支援を充実させなければならないということを改めて実感した研修でした。

日本語が大好きになるきっかけ

杉並区立天沼小学校 教諭 宮崎 栞恋

Aさんは、令和2年4月に本校に入学し、2年間担任をしています。新型コロナウイルスの影響で、入学式の次の日から学校は休校となり、次に会えたのは時差登校の始まった6月からでした。出会った頃は、日本語はほぼ話すことができず、常に英語で話し、Aさんとのコミュニケーションは簡単な英単語をつなげた会話でした。どうしても意思疎通ができないときは、英語を話せる先生を呼び、通訳してもらったり、市販の自動翻訳機を使って会話をしたりすることもありました。そのような環境の中でも、Aさんはクラスみんなに自分から話しかけるなど、積極的な姿が見られ、気づけば友達がたくさんできていました。授業にも意欲的に参加し、誰よりもやる気にあふれていました。

そのような中で、週に2時間の日本語指導が始まりました。初めは新しい先生との出会いに緊張していましたが、日本語指導を重ねるにつれ、「私、日本語大好き!」「私、日本語指導の先生大好き!」と、週1回の日本語指導と先生に会えることをとても楽しみにしており、担任としても嬉しく思います。2年間の集大成として、「国際交流の集い」のスピーチに参加し、堂々と発表できたことは、Aさんの中で大きな自信になったことと思います。

あたたかいご指導で、日本語を大好きになるきっかけを与えてくださった日本語指導の先生には、心より感謝申し上げます。



日本語訪問指導

杉並区立高円寺小学校 主幹教諭 中野 富雄

「今日もいっぱいお話していました」

日本語指導の先生の指導記録ノートには、たびたびこのような記録が書かれています。その記録を見るたびに「良かったなあ」と思います。

5年生の12月、ネパールから日本に来たBさん。英語を話すことはできるのですが、日本語はほとんど話すことができませんでした。また、自分から日本語で話そうとすることも少なく、私はBさんの日本語の習得に不安を感じていました。担任や周りの児童は、なるべく日本語で話しかけるのですが、英語の得意なBさんは英語で話すことが多かったです。そのため、他の児童も英語で話しかけ、担任である私も必要な指示は英語ですることがありました。また、担任としてBさんの日本語の個別指導も十分にできているとは言えず、不甲斐ない思いでいました。

そのような状況を支えてくださったのが、日本語指導の先生でした。日本語でのコミュニケーションが必要な彼に、毎回、優しく丁寧に日本語の指導をしてくださいました。日本語指導のあった日の日記には、毎回「日本語の授業が楽しかったです」と書かれており、彼も楽しみながら日本語に親しんでいることが良く分かりました。また、担任にもフィードバックをくださったり、こちらの要望を受けて補充プリント等を用意してくださったりするなど、Bさんのために丁寧に対応してくださいました。そのような関わりは、Bさんのみならず担任としても精神的な支えでした。

現在、6年生のBさんは、3月の卒業を控えています。日本語の習得への道はまだまだ長いですが、平仮名・片仮名、1年生の漢字を読んだり書いたりすることや、身の回りの物、簡単な要求や質問などを日本語で話すことができるようになってきました。Bさんの年初めの目標には「日本語が話せるようになる」と書かれていました。卒業まで残り少ないですが、ネパールから遠い異国の地である日本で暮らすBさんが、少しでも日本に親しみ、より良く生活することができるよう支えていきたいと思っています。日本語指導の先生の力を借りながら。

日本語指導と周囲の支えの中で

杉並区立東原中学校 教諭 海野 華奈

Cさんは、小学6年生の1月にネパールから来て、その年の4月に本校へ入学しました。小学校でも日本語指導を受けていましたが、3ヶ月ほどでは日常の会話はなかなか難しく、入学当初もさまざまな書類の説明や教科の準備物等の説明が伝わらず、翻訳機を片手にコミュニケーションをとるという日々が続きました。新しい環境に慣れることも大変な上に、周囲とのコミュニケーションが思うようにとれないという不安を抱えながらもCさんは、クラスメイトの動きに必死についていっていました。

そのような日々が1ヶ月ほど続いた頃に、日本語指導の授業が始まりました。週に2回の授業を通して、ひらがなやカタカナの読みや漢字の読み書きの練習に励んでいます。その時間にはクラスや行事などの話も本人から積極的にするようで、リラックスできる時間でもあるのだろうなと思っています。少しずつではありますが、日本語も上達してきており、クラスメイトの名前を漢字で覚えて呼ぶことができたり、昼休みには友達と日本語で会話をしている場面が見られたりと、日本語指導の積み重ねの成果は大きいと強く感じています。

最近3学期に行われる百人一首大会にむけて和歌を覚えています。毎日、20首ずつのテストがあるのですが、満点を取ることもできています。実際に百人一首をしたときは数枚の札を取ることもできました。

Cさんの短期間での日本語の上達の鍵になっているのは、周囲のサポート、本人の前向きな気持ち、そして日本語指導であると思います。基礎である部分を日本語指導の時間で習得し、日々の生活の中で、周りの人とコミュニケーションをとりながら、それを定着させていく。それには本人の前向きな気持ちが大切になります。今後もCさんが日本を習得し定着させていけるよう、日本語指導の先生とも連携をして、しっかり支えていきたいと思っています。



ありのままの自分で

杉並区立松溪中学校 主幹教諭 加藤 入馬

本校1学年には、ネパール籍の生徒が2名、中国籍の生徒が1名在籍している。特にネパール出身のDさんとEさんは日本語を十分に習得していないため、日本語指導の先生による日本語指導をはじめ、学習面に関して可能な限りの配慮を行っている。

授業ではデジタル教科書のルビ付きデータを取り出し、印刷して2人に渡すことで難しい漢字に対応し、必要に応じて個別に語句の説明を行っている。また、国語の漢字テストでは国語科の教員が日本語の習得段階に合わせた独自のテストを作成している。週に2~3日、それぞれ1~2時間の取り出しで日本語指導していただく以外は、他の生徒と一緒に授業を受けているが、日本語指導の成果や様々な配慮、本人の努力もあり、分からないことは自分から日本語を交えて尋ねるようになってきた。

定期考査では、全教科の教科担任に協力を依頼し、ルビ付きの問題を作成している。さらに、試験当日は別室を設け、正規の時間の1.5倍の時間を配分し、問題の意図を捕捉するサポートのための教員を1名つけ、彼らが本来もつ能力を正しく評価できる工夫を行っている。

最近の様子として、Dさんは地理の授業中にネパールの自然環境について日本語で紹介し、Eさんが授業中に音読をした際にはクラスメイトから大きな歓声と拍手が起こるなど、彼らの努力の成果が国際理解への一助となっている。また、担任からの大切な連絡については、日本語が比較的得意なDさんがEさんに通訳するなど、ネパール出身の生徒同士の助け合いも見られる。周囲の生徒も彼らの特性を理解し、工夫してコミュニケーションがとれるようになってきた。Dさんはバレーボール部、Eさんはサッカー部に所属するなど、スポーツを通して言葉の壁を越え、楽しく汗を流す様子も印象的である。

日を追うごとに日本語はメキメキと上達し、2人とも学校に居場所をもち、ありのままの自分でいられるようになってきた。12月の「国際交流の集い」をもって日本語指導は満期を迎えるが、先生から教わった日本語や日本文化を胸に、日本とネパールの懸け橋となれるよう、本校で充実した中学校生活を過ごしていくことを願っている。

令和3年度 国際交流の集い

済美教育センター 指導主事 今城 卓也



昨年度より新型コロナウイルス感染症拡大に伴い規模を縮小し、感染症防止対策を十分に行い新たな形で、帰国児童及び外国人児童が日本語指導で学んだことを発表する「国際交流の集い」が杉並区立久我山会館で開催されました。今年度は、前半の部は小学校の帰国児童及び外国人児童によるスピーチ、後半の部は中学校の帰国生徒及び外国人生徒によるスピーチでした。自分の好きなことや得意なこと、修学旅行の思い出、この一年間の自分の成長等について発表しました。今回参加した11名の児童生徒一人ひとりが、今まで学んできた

日本語を使って自分の思いを伝えようと、真剣にスピーチをしていました。

今回の国際交流の集いを通して、生まれ育った国、文化、生活等、様々な違いがあっても、自分の思いや考えを会場の皆さんに日本語で伝え、聞いてもらうことで心と心がつながるよい機会になったと実感しました。本人の努力はもちろん、保護者や先生方、支えてくれた友達の影響も大きかったことでしょう。そんな様々な人たちの想いを受けたスピーチだからこそ強い感銘を受けました。

最後になりましたが、開催にあたり、各校の校長・副校長、担任の先生方には格別の御配慮と御支援を賜りました。ここに御礼申し上げます。



今年度の日本語訪問・補充指導について

済美教育センター国際理解教育担当

今年度も各学校におかれましては新型コロナ感染防止対策に御苦労があったことと思います。そうした中、日本語訪問・補充指導をすすめるにあたり、学習環境（教室）の準備やソーシャルディスタンスの確保等につきましては多大な御理解と御協力をいただき、誠にありがとうございました。また、今年度で34回目となりました「国際交流の集い」が無事に開催できましたことにも深く感謝申し上げます。

さて、左下の表は今年度の訪問・補充指導実績です。また、右下のグラフは最近5年間の指導人数の推移です。今年度も、日本語の指導対象の子どもたちが様々な国から来日・帰国していることやその人数も近年増加の傾向にあることが分かります。

訪問・補充指導実績

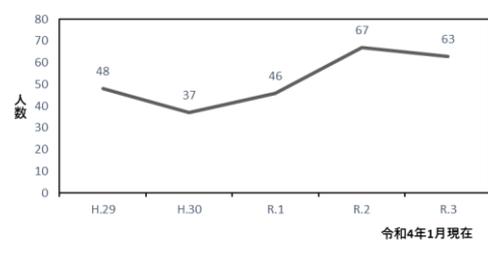
学年別内訳

出身国 滞在国等	合計	小学校									中学校		
		1	2	3	4	5	6	1	2	3			
		ネパール	30	2	3	4	2	2	4	9	3	1	
中国	18	8	5	1	1	1	1		1				
アメリカ	9	2	1	4		1		1					
インド	3				1	1			1				
インドネシア	1	1											
ドイツ	1	1											
モンゴル	1			1									
合計	63												

令和4年1月現在

現在、済美教育センター国際理解教育担当3名、外部講師14名の総勢17名が小・中学校からの要請を受け、日本語の訪問指導・補充指導にあたっています。子どもたちが、一日も早く日本語で自分の気持ちや考えを伝えることができるようになり、学校や日本での生活を楽しみ、やがては出身国

最近5年間の訪問・補充指導人数の推移



や滞在国との懸け橋となって活躍してくれることを願いながら、日々日本語適応指導に努めてまいります。